

漫述

佐久間象山

謗る者は汝の謗るに任せ
嗤う者は汝の嗤うに任せん

天公本我を知る
他人の知るを覓めず

【作者】佐久間象山(一八一〇〜一八六四年)(文化八年〜元治元年)幕末の学者、開国論者、信州松代に生まれる。姓は平氏、名は啓(ひらき)

又は大星(たいせい)、字は子迪(してき)、のち子明(しめい)と改める。通称は修理(しゆり)、象山はその号、幼にして鋭敏、十六歳で鎌田桐山の門に入り、のち佐藤一斉に師事、神田お玉ヶ池に塾(象山書院あるいは五柳精舎という)を興す。常に国家の安危を憂い、国事に奔走したが、おしむべし元治元年七月刺客のために斃れる。年五十四歳。吉田松陰、勝海舟はその門下生。

【語釈】*漫 述…思いつくままに述べる。 *謗…非難する。 *嗤…冷笑、あざけりわらう。 *天 公…天帝、天、宇宙万有を支配する神。

【通釈】私を非難する者も、また、あざけり笑う者も、ともに諸君の意に任せよう。天はもとより私のことを知ってくれているから、他人から認められようなどとは思っていない。

【備考】幕末、開国論を唱え、世人のそしりや嘲笑を一身に浴びながらも、自説を曲げなかつた作者の信念を述べたもの。